世間解　第三八八号
令和二年六月
発行　西法寺

念仏もうさるべし

―学仏大悲心（仏の大悲心を学ぶ）ニー

六月になるのであります。皆さまには各々のご縁の中で阿弥陀さまのご本願に包まれながら「なんまんだぶ、なんまんだぶ…」とお念仏ご相続のことと存じます。まだまだ油断のならない日が続きます。お身体くれぐれもお大切になさっていただきますようお願い申しあげます。

今、「お願い申しあげます。」と書きながら思い出したお言葉があります。

こをもつて「帰命」は本願招喚の勅命なり。「発願回向」といふは、如来すでに発願して衆生の行を回施したまふの心なり。

これは親鸞聖人が「南無阿弥陀仏」というお念仏さまのお心をご解釈くださったところにあるお言葉です。ここに“発願”とあります。基本的な意味は私が阿弥陀さまのお浄土に生まれさせていただくんだと願う（はっきりと思い取る）事でありますが、親鸞聖人は“如来すでに発願して衆生の行を回施したまふの心”とおっしゃってくださるのであります。私があれこれ考える、〈あーだろうか、こーだろうかと思う〉そのズーッと前から阿弥陀さまは「お前さん必ず支えてるんだから、お念仏を称え、そのお念仏を聞きながらお浄土を目指して大切に大切に“いのち”を生ききっておくれよ」と、私がそのことに気づかせていただく遙か前から阿弥陀さまは私を願い続けてくださっていたのであります。“如来すでに発願して”であります。私が色んな事を思ったり願ったりするその全体をすでに阿弥陀さまは願い続けてくださっておったのでありました。

さて、とっても前置きが長くなってしまいました。先月、五月七日は行信教校名誉校長・梯實圓和上の七回忌のご命日でありました。

二月頃から騒がしくなった新型コロナウイルスの影響で、和上ご自坊のご法事も、行信教校での追悼法要も来年に延期となったのであります。

今月の『世間解』では梯和上の七回忌にちなんで改めて和上のお言葉をお聞かせいただこうと思っておったのでありましたが、前が長くなったこともあり、この際、何回かに分けてお聞かせいただこうと思います。和上がご往生になられる前の年、平成二十五年十月十四日の西法寺・報恩講さまでのご法話です。

『…どない思うてお念仏するのかということを心配するんじゃなくて、「なんまんだぶ」と称えなさいということです。「なんまんだぶ」と称えたら「なんまんだぶ」と聞こえてくるでしょうが、

その“声につきて決定往生の思いをなすべし”と法然聖人はおっしゃるんです。

有り難いか、有り難くないか、そんな事を詮索する必要はない。“ただ念仏しなさい”心が澄みきってるか、濁ってるか、そんな事も問題にしなさんな。ただ「なんまんだぶつ」と称えなさい。称えたら聞こえてくる「なんまんだぶ」という声があるだろう。その声を聞いたら“必ず救るぞ”と如来さまがおっしゃってくださってるんだから、これ仏さまの声だからね。

「なもあみだぶつ」は人間の言葉ではないですよ「なんまんだぶつ」は。仏さまの言葉です。

十方微塵世界の　念仏の衆生をみそなはし
摂取してすてざれば　阿弥陀となづけたてまつる

と親鸞聖人がご和讃の中でおっしゃってるでしょう、あれですよ。

「なんまんだぶつ」てなんて声ですか？というたらそれは“摂取して捨てない”“お前を決して見捨てないぞ”と阿弥陀さんがおっしゃってる。

“大丈夫、お浄土へ連れてゆくぞ”とおっしゃっている。その仏さまのお声が〈なんまんだぶ、なんまんだぶ〉と聞こえてくるんだ。

ただお念仏しなさい。どんな心で称えているかとか、どんな思いで称えているかとかそういうことを問題にしないで、「なんまんだぶ、なんまんだぶ」とお念仏を称える。そして、聞こえてくるお念仏、聞こえてくる声、〈なんまんだぶつ〉と聞こえてくださる声について“決定往生の思いをなせ”。

“大丈夫だぞ”とおっしゃってくださるんだから，おお、大丈夫だ、大丈夫だ‘と聞いて慶ぶんだ。それを“信心”というんだ。…』今月はここまで…。合掌